

11  
November



「読む」とはどういうことでしょうか。人の「顔色を読む」、相手の「心を読む」、「先を読む」、「サバを読む」・・・いろいろ「読む」ものがたくさんありますが、たとえば人の「心が読めたら」、たとえば「先が読めたら」どれほどラクに生きられるだろうかと思うことがよくあります。「〇〇さんはいま何を考えているのだろうか」と人の心が読めたら、それに対応する行動を考えることができます。1年先・10年先の世の中が読めたら、どのように生きていったらいいかも考えることができます。ところがこの「読む」ことがむずかしいのです。

よくいわれる「K・Y」とは、その場の空気が読めないために的外れな発言や行動をする人のことをいいます。こんなふうに言われないためには、「その場の空気を読む」努力が必要です。

では、具体的にどうしたらその場の空気を、「読む」ことができるのでしょうか。

じつは読書にこそその答えがあるのです。「その場の空気を読む」には、そこにいる人たちのことばづかい、声の調子、顔の表情、ことばを発した状況などに気をつけなくてはなりません。

同じことが、本を読むときにも必要です。場面や周囲の環境を想像し、なぜここで主人公がこのような行動をとるのか、なぜこのような発言をするのかを考えます。つまり、「本を読む」ことは、さまざまな想像力をはたらかせて物語の場面や状況を考えることにほかならないのです。そして、この想像力こそ空気を読むための力であり、それは読書から得られるのであって、テレビや映画では得られるものではありません。テレビや映画は、主人公のしぐさやその場の状況がすでに映像としてながれるために、想像する力が弱められてしまいます。活字を追うことによって得られる想像は、表現や感情もテレビのそれよりもはるかに豊かになります。また、本から感動を得ることで、穏やかな気持ちになり他人に対する思いやりの気持ちが生まれるなど、心を落ち着かせる効果もあり、ことばが豊富になることで友だちとのコミュニケーションもうまくとれるようになります。



読書は、新たなひらめきを生んだり、問題を解決するための新しい方法を得たりすることにもつながります。問題を解決するということはアウトプットの作業です。それまでに勉強した知識や身につけた技術をつかって、目標・課題をクリアできるように取り組むことです。アウトプットの能力を高めるには、インプットの量を増やすことが基本です。インプットの量が少なければ、アウトプットの量も当然少なくなるでしょう。新たなひらめきを生んだり、さまざまな問題を解決するための方法を見つけ出すこともできるでしょう。さあ あなたも読書週間を読書習慣に!!